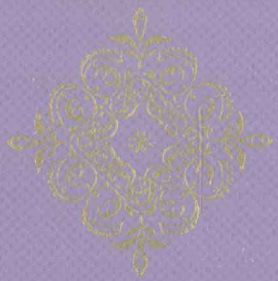

A TREASURY OF JAPANESE POETRY

日本の詩歌

1

島崎藤村

中央公論社

日本の詩歌　1
©1967

島崎藤村

昭和42年9月5日初版印刷
昭和42年9月18日初版発行　　価480円

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷　凸版印刷株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　大口製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

序　5
若菜集　7
一葉舟　167
夏草　188
落梅集　331
詩人の肖像　井上靖
鑑賞　伊藤信吉
年譜
カット　和田英作

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

島崎藤村

序

遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。
そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばゝり、いづれも明光と新声と空想とに酔へるがごとくなりき。
うらわかき想像は長き眠りより覚めて、民俗の言葉を飾れり。
伝説はふたゝびよみがへりぬ。自然はふたゝび新しき色を帯びぬ。
明光はまのあたりなる生と死とを照せり、過去の壮大と衰頽とを照せり。
新しきうたびとの群の多くは、たゞ穆実なる青年なりき。その芸術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた偽りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の涙はかれらの頬をつたひしなり。こゝろみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寝食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの声に和しぬ。

これは『藤村詩集』の序文である。藤村は明治三十年から同三十四年までの四年間に『若菜集』『一葉舟』『夏草』『落梅集』の四詩集を出したが、その後、この四詩集をまとめて合本『藤村詩集』（明治三十七年九月刊）を出版した。その時この序文を書いたのである。

明治三十七年は藤村の数え年三十三歳に当るが、それは藤村にとって多くのことのあった年である。この年二月、日本は国運を賭けて帝政ロシアとの戦い（日露戦争）に入った。藤村自身は信州小諸町（今の小諸市）に住んで小諸義塾の教師をし、家庭をもっていた。これより早く『落梅集』を境にして詩と別れ、「千曲川のスケッチ」に続いて幾つかの短篇小説を書いた。また、最初の長篇小説「破戒」に着手し、その出版資金を得

詩歌は静かなるところにて想ひ起したる感動なりとかや。げに、わが歌ぞおぞき苦闘の告白なる。

なげきと、わづらひとは、わが歌に残りぬ。思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いさゝかなる活動に励まされてわれも身と心とを救ひしなり。

誰か旧き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじゝ新しきを開かんと思へるぞ、若き人々のつとめなる。

生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。

われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。芸術はわが願ひなり。されどわれは芸術を軽く見たりき。むしろわれは芸術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき。

あゝ詩歌はわれにとりて自ら責むるの鞭にてありき。わが若き胸は溢れて、花も香もなき根無草四つの巻とはなれり。われは今、青春の紀念として、かゝるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。

藤村

るために、妻冬子の生家を北海道函館にたずねたのもこの年だった。

詩から小説へ。ロマンチシズムの世界からリアリズムの世界へ。文学生涯のその転機。『落梅集』以後、すでに詩作は絶えていたけれども、それに加えて『藤村詩集』の出版は、それこそ詩との最後の別れだった。

詩との別れは青春との別れだった。過ぎていった青春の輝かしい日々。消えていった若々しい情熱の日々。この序文には追懐の情があふれている。これは近代詩成立の宣言であると同時に、藤村自身がその青春に送る惜別の言葉にはかならなかった。

＊鑑賞欄に挿入した四枚の絵は、合本『藤村詩集』の挿絵である。

若菜集

こゝろなきうたのしらべは
ひとふさのぶだうのごとし
なさけあるてにもつまれて
あたゝかきさけとなるらむ

ぶだうだなふかくかゝれる
むらさきのそれにあらねど
こゝろあるひとのなさけに
かげにおくふさのみつよつ

そはうたのわかきゆゑなり
あぢはひもいろもあさくて

『若菜集』は明治三十年八月出版された。藤村の第一詩集である。序詩に短い序文を添え、収録作品五十一篇。中村不折が装幀をし、数多くの挿絵が入っている。表紙に翅を広げた蝶が描いてある。

藤村の回想によれば、それまでほとんどの詩人が個人詩集を出したことがなかったので、『若菜集』を出した時、「単独で詩集を出すのはすこし出すぎた仕打だ、生意気だという声が聴えたほど」だと

おほかたはかみてすつべき
うたゝねのゆめのそらごと

明治二十九年の秋より三十年の春へかけてこゝろみし根無草の色も香もなきをとりあつめて若菜集とはいふなり、このふみの世にいづべき日は青葉のかげ深きころになりぬとも、そは自然のうへにこそあれ、吾歌はまだ萌出しまゝの若菜なるをや。

おえふ

処女(をとめ)ぞ経(へ)ぬるおほかたの
われは夢路(ゆめぢ)を越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河(やまかは)をながむれば

いう。当時の文学の世界はそんなにも狭く未熟だった。

時代の新声を伝えるこの詩集は若い人たちの共感を呼び、おびただしい反響を呼んだ。それは詩人島崎藤村の登場であると同時に、わが国の近代詩の夜明けを告げるものであった。この詩集によって「新しき詩歌の時」が招来されたのである。

あたかも詩集をいろどる花々のように、『若菜集』にはその巻首に、六人の女性を歌った詩が置いてある。「おえふ」「おきぬ」「おさよ」「おくめ」「おつた」「おきく」の六篇がそれである。詩集のページを開いた時、なんとなく花

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

水静なる江戸川の
ながれの岸にうまれいで
岸の桜の花影に
われは処女となりにけり

都鳥浮く大川に
流れてそゝぐ川添の
白菫さく若草に
夢多かりし吾身かな

雲むらさきの九重の
大宮内につかへして
清涼殿の春の夜の
月の光に照らされつ

雲を彫め濤を刻り

やいだ印象を受けるのは、これらの作品が最初に出てくるからである。

この六篇の詩は明治二十九年十二月、雑誌『文学界』に「うすごほり」という総題のもとにまとめて発表された。『若菜集』に収める際に「うすごほり」の総題をはずしたが、次いで改刷版『藤村詩集』の出版に際して、こんどは「六人の処女」という総題を付した。六人の女性を一度に歌ったことは、藤村として野心的な試みだったのである。

「おえふ」「おきぬ」を初めこの六人の名は、今の私どもには古風な感じがする。だが、明治年代にはこういう名前が一般的だった。当人たちは、これに「葉」とか「絹」とか「小夜」とかの文字を当てて日常的に使用した。

六人の女性はもちろん実在した

霞をうかべ日をまねく
玉の台の欄干に
かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の
耀くさまを目にも見て
ときめきたまふさま〳〵の
ひとのころもの香をかげり

きらめき初むる暁星の
あしたの空に動くごと
あたりの光きゆるまで
さかえの人のさまも見き

天つみそらを渡る日の
影かたぶけるごとくにて

わけでなく、藤村の情意の世界に生れた人たちである。だからといって、これが藤村の理想の女性像だったのでもない。これらはすべて詩の中の物語の女性である。

「おえふ」には、東京江戸川のほとりに生れた若い女性が描かれている。若いといっても「処女ぞ経ぬるおほかたの／われは夢路を越えてけり」というのだから、しだいに齢を重ねてゆく年ごろである。終連の「おのれも知らず世を経れば」もこれに対応する。ここに歌い込まれた時間的経過が、この詩全体に一抹の寂しさとなって流れている。

その女性は「大宮内につかへして」というように、宮廷に仕えていたが、そこを去って江戸川のほとりをさまよいながら、過ぎた年月を心寂しく追懐した。人の世の

名の夕暮に消えて行く
秀でし人の末路も見き

春しづかなる御園生の
花に隠れて人を哭き
秋のひかりの窓に倚り
夕雲とほき友を恋ふ

ひとりの姉をうしなひて
大宮内の門を出で
けふ江戸川に来て見れば
秋はさみしきながめかな

桜の霜葉黄に落ちて
ゆきてかへらぬ江戸川や
流れゆく水静にて

浮き沈みはさまざまである。そうして「わが世の坂にふりかへり」と自分の米し方を振り返った時、おのずから「微笑みて泣く」涙をわが身にそそいだのである。

この詩は「若き命に堪へかねて／岸のほとりの草を藉き／微笑みて泣く吾身かな」という言葉で終っている。なんという新鮮な感情の表現だろう。若い日に人は誰しも「微笑みて泣く」涙を経験する。それはわれとわが身をいとおしむ涙である。

誰しも一度は経験するその涙——青春のその思いは、恐らくそれまでの詩に見られないものであった。稀にはそういう作品があったかもしれないが、しかし『若菜集』の藤村にいたって、そのような抒情がむしろ通例のことになったのである。ここに新しい抒情の形成があった。

あゆみは遅きわがおもひ

おのれも知らず世を経(へ)れば
若き命に堪へかねて
岸のほとりの草を藉(し)き
微笑(ほほゑ)みて泣く吾身かな

おきぬ

みそらをかける猛鷲(あらわし)の
人の処女(をとめ)の身に落ちて
花の姿に宿かれば
風雨(ふうう)に渇(かわ)き雲に饑(う)ゑ
天翔(あまかけ)るべき術(すべ)をのみ
願ふ心のなかれとて

「おきぬ」の抒情の裏には、想念もしくは観念というべきものが潜んでいる。前の「おえふ」が純粋の抒情詩だったのに対して、この詩には観念抒情詩といってよいようなところがある。それは作者が人生を一つの「囚(とら)われ」として観じているからで、その囚われの観念を、抒情的な装飾で表現したの

黒髪長き吾身こそ
うまれながらの盲目なれ
芙蓉を前の身とすれば
泪は秋の花の露
小琴を前の身とすれば
愁は細き糸の音
いま前の世は鷲の身の
処女にあまる羽翼かな

あゝあるときは吾心
あらゆるものをなげうちて
世はあぢきなき浅茅生の
茂れる宿と思ひなし
身は術もなき蟋蟀の
夜の野草にはひめぐり

である。

「黒髪長き」その「おきぬ」を、作者は空翔ける荒鷲の化身に見立てた。荒鷲を花の女性に化身させるのは、とっぴな思いつきのようだけれども、こういう化身による形容は、新体詩の時代には必ずしも珍しくなかった。

花の処女の中にも、激しい思いを燃やし、激しく羽ばたこうとする荒鷲が棲んでいる。またその処女には芙蓉の花の可憐さがあり、琴の音の懐かしさがあり、蟋蟀の声の哀れさがあり、小鳥の優しさがあり、胸をふるわせる恋ごころがある。剛さと弱さ。この二つのものの せめぎ合いは、しかし「おきぬ」という女性だけのことではない。それは人生における私どもの心の姿だ。作者は一人の処女を通して、その人生的想念を述べたのである。

たゞいたづらに音をたてゝ
うたをうたふと思ふかな

色にわが身をあたふれば
処女のこゝろ鳥となり
恋に心をあたふれば
鳥の姿は処女にて
処女ながらも空の鳥
猛鷲ながら人の身の
天と地とに迷ひゐる
身の定めこそ悲しけれ

おさよ

潮さみしき荒磯の

「おきぬ」が盲目だったことについて、蒲原有明は「この盲目の表現には特殊な輪廻思想がはたらいている」(『藤村全詩集』解説)と言っている。

「おさよ」はそのテーマの展開の順序からいって、第十一連の「髪は乱れて落つるとも／まづ吹き入

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo